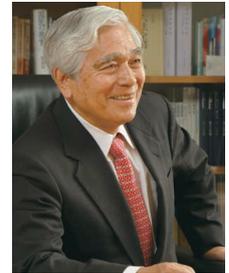




# 狭山ヶ丘通信

本校の実情をお知らせし、教育問題、社会問題等に関する本校校長小川義男の見解などをお読みいただくため「狭山ヶ丘通信」を発行いたしております。また、本校ウェブサイトにてバックナンバーもご覧いただけます。https://www.sayamagaoka-h.ed.jp/ 〒358-0011 埼玉県入間市下藤沢981 TEL:04-2962-3844 FAX:04-2962-0656 狭山ヶ丘学園 広報部



狭山ヶ丘高等学校  
狭山ヶ丘高等学校附属中学校  
校長 小川義男

## 大志を抱かせる ことの大切さ 地域に愛される ことの大切さ

クラーク先生の「大志」とは、「小成に安んじない」ことだと教わったことがある。

狭山ヶ丘学園の今年の大学進学実績は、私が言うのもおかしいが、特に輝かしいものである。難関中の難関東大文科三類にも合格者が出たし、国立公立大学医学部に対しては、すでに三名の合格者が出ている。東大現役合格二名というのも、史上初めてのことである。私立難関大学への合格者も、相当の数に上る。

但し、先頭陣の活躍は極めて著しいが、全体的に見ると、いささか堅実の気配に過ぎているのではないかと思う。大きな志を持ち、世界そのものを動かしていこうとする気配が、いささか乏しいかもしれない。それが最近の「狭山ヶ丘」の弱点であり、我々は、

この「堅実主義」を、断固として爆砕しなければならぬ。

小成に安んじない大きな志を、若者諸君には抱いてもらいたい。

今、大学の生き残りも賭けてであろうが、「指定校制度」という、高校の成績さえ良ければ、そのレベルに照応して、大学に合格出来るという仕組みが、あえて言うが「蔓延」している。生徒の主たる関心は、高校での成績に好結果を獲得して、難関とは言わないまでも、相当水準の大学に合格することである。

医学部や多くの国立大学に、このルートで「潜入」できる可能性は少ない。結局、指定校を狙う「真面目」生徒と、制度を頼らず、命がけの努力を重ねて入試に挑戦する「野心的」グループとに別れてしまいがちなのである。

今、世界は混乱の渦の中にある。若者に求められているのは、人類のために我が身を惜しまぬほど努力を傾ける献身的英才の育成なのではないだろうか。

野口英世先生は、日本の国力が、途上国並みに扱われている時代に、苦学の末に医学をマスターし、アフリカに渡って黄熱病の研究に専念し命を失った。母国に国力のある今日であれば、確実にノーベル賞を獲得できた人物である。国家は野口先生

や北里先生を、もっともっと顕彰してしかるべきである。

先人の努力は、すさまじいものであった。今の英才たちの努力ぶりにも「鬼気迫る」ものがある。しかし、若者の大部分は堅実で穏やかな日々を力をそそぐ青春を生きているのではあるまいか。

世界平和が脅かされている。安倍元総理は、プーチン氏と、極めて親しかったが、私はプーチン氏の真意、狙いについて気がかりなところがあった。「あの二人は、あんなに親しくて、奪われた北方領土、奪った北方領土問題をどのようにして解決するつもりなのであろうか」と、私は思った。

あるとき、修学旅行の下見で根室を訪れた。北方領土返還要求の施設があった。中に人がいる気配がない。がらんとした、掃除した気配さえない。怒った私は、施設内に聞こえるような大声で怒鳴りまくった。誰かが出てきた。人はいたのである。私は怒り狂って彼を問い詰めたが、北方領土返還要求の姿勢さえない。私は、プーチンと安倍元総理は、歯舞、色丹の極小島だけで「お茶を濁す」つもりだなと思った。

問題は択捉島だ、それに国後も、

その巨大な島は、今やロシアの軍事基地、もしかすると核基地にされている可能性もある。

プーチン、安倍の「友情」の本質は、かくのごときものだと思ふ。安倍氏暗殺の後、その国葬に反対の姿勢を直ちに私が明確に示したのは、そのことがあったためである。

このままでは、北海道も危ない。プーチンにスターリン並みの危険があることを忘れてはならないと思ふ。

フルシチョフ氏に、私は会っているが、ソ連邦から東欧人民を解放したゴルバチョフ氏に私は会っていない。先日彼は逝去したが、プーチン氏は、その葬儀にも出なかった。安倍氏との十数度にわたる出会いに照らして、彼は国葬に参加すべきではなかったか。我が国の国力も、国際連帯性に照らして、簡単に我が国を侵略されることのあるまいが、その危険性は確実に存在する。全国の皆様、若者諸君にも、このあたりをしっかりと考えて頂きたいのである。

学校は、地域の中に生きる。入間市、所沢市をはじめ、近隣自治体、近隣住民の皆様、に愛されなければ、私立学校が生き続けることはできないのである。

地域の皆様のご支援、ご協力を切にお願い申し上げる次第である。

# 「これから」の狭山ヶ丘の教育 ～情報社会に適応し、活躍する生徒を育む!～

2023年度入学生より、タブレットPC「Chromebook」をすべての生徒の学用品とします。校舎内には生徒用Wi-Fiが完備されており、いつでも、どこでも教育コンテンツを使用することができる状態にあります。学校の安全なネットワークを利用して、様々な活動をオンラインで行うことができます。

以前より、様々な授業や総合学習でICTを活用してきましたが、新年度よりさらに多くの教科、活動、学校行事、各種連絡、授業の補助やゼミなど、学校活動の幅広い分野でDX(デジタルトランスフォーメーション)を進めていきます。一方で、タッチ操作が中心のタブレットやスマートフォンが手軽に使用



る現代において、社会的には「PC離れ」が懸念されています。本校ではキーボードのある「Chromebook」を用いることで、タイピングやショートカットキーの活用など、PC操作の基本を身につけられるよう、指導していきます。

また、本校ではICT活用の下地となる、**モラルやセキュリティの知識を持たせることに重点を置いています**。取り組みとして、LINE社による安全講座や、情報処理安全確保支援士の資格を持つ教員による指導などを実施しています。生徒自身が身を守り、適切にICTを活用する力を養います。狭山ヶ丘は、情報社会で活躍することができる生徒を育成すべく、教育活動に取り組んでいます。

吉實 大輔 (情報科教諭 / 情報管理部長 / 情報処理安全確保支援士)より

本校の他教科では「Chromebook」を使用しますが情報科の授業では、デスクトップPCをメインに使用します。大きめのディスプレイを用いての表計算やプログラミングは勿論、それを動作させているコンピュータ自体についても詳しく扱う

ためです。先日の授業では、端末の内部を開けてメモリを増設する演習を実施し、生徒から好評でした。こうした経験を与えることで、物事をプラットフォームのままにせず、すずん根幹から理解しようとする人材の育成に努めています。



## スキー教室

2月18日～21日、志賀高原にて高校1年生のスキー教室を3年ぶりに実施しました。志賀高原の大自然に触れ、充実した宿泊学習となりました。



### スキー教室を振り返って

1年H組 松村佑馬

スキー教室では、レベル別で実習班を組むので、初めて会話をする人も多くいましたが、僕の実習班はとても良い雰囲気でした。転んだときにペースを合わせてくれるような優しい人と出会い、全体的に和気あいあいとしながらも真剣な気持ちで、このスキー教室を楽しめました。指導者の方も一人一人をよく見て個人的なアドバイスをしてくれたり、レースなどの楽しい練習を計画してくれたりしました。とても感謝しています。

スキー教室を通して、僕はレベル4であった板を平行にして曲がる技までできるようになりました。習得に当たり苦労した点は、体重移動がハの字ターンと逆であることです。このスキー教室では、他のクラスの人と関わる機会が多く、不安だった来年度のクラス替えが楽しみになりました。

## 付属中学校英語スピーチコンテスト開催!

1月28日(土)に、付属中学校の行事である「英語スピーチコンテスト」を実施しました。この行事は、中学校の英語教育の一環として毎年行われていますが、コロナ禍以降、生徒が一堂に会した発表は控え、Google Meetを活用したライブ配信を用いて全生徒に向けて発表しています。本年度は一年生は物語「Amrita and the Trees」の音読、二年生はキング牧師のスピーチの暗唱、三年生はテーマ「自分の好きなもの」に沿ってスピーチを自作し、発表を行いました。各学年の優勝生徒の感想をご紹介します。

### 1年1組 寧 蔚



私がスピーチコンテストを通して学んだ大切なことは、二つあります。一つ目は少しずつ努力することの大切さです。何度も教科書の英文を音読し、繰り返しスピーチの練習をしました。努力することにより、自分の世界観を広げたり、今までの自分を超越するような完成度を目指したりすることができました。二つ目は目標を持って物事に取り組むことです。例えば、私の今回の目標は審査員の先生方を楽しませることでした。そのために、感情を声や表情で表したり、発音を良くしたりして、興味深かったと思ってもらえるように様々な工夫をしました。自ら設定した目標に近づこうとする姿勢が人を成長させると私は今回のスピーチコンテストで学ぶことができました。

### 2年2組 丸山 祐真



今回、二年生はキング牧師の演説を暗唱で発表しました。僕は昨年のスピーチコンテストに出られず、とても悔しい思いをしました。ですから、今回は自分が一番得意なところで勝負しようと思い、表現力に着目して練習を重ねました。初めは単語の発音や意味が分からず周りの人が上手くなっていくことに焦りを感じました。しかし、友達や先生方にアドバイスをもらい、自分にしかできないスピーチを目指して練習を続けました。すると、段々と自分のイメージしたスピーチができるようになりました。僕は今回のスピーチを通して、努力することの大切さを学びました。これを生かして、何事も諦めず、挑戦し努力していきたいです。

### 3年2組 坂本 偲音



毎年行われる英語スピーチコンテストでは、一年生は英文の朗読、二年生は偉人のスピーチの暗唱ですが、三年生はテーマに沿って自分で英作文を考え暗唱します。今年の三年生のスピーチのテーマは「自分の好きなもの」でした。私はハリウッド俳優について紹介しようと思いました。私は初めてハリウッド俳優の映画を見た時の感動を伝えられるように工夫しながら原稿を書きました。そして、今までの学習で身に付けた英語の知識を多く使いました。感情を表す語句ははっきりと、強調したい部分はゆっくりと話し、ジェスチャーを加えるなどの工夫をしました。本番は、英語で伝える楽しさを感じながら臨むことができました。優勝生徒に選ばれ、嬉しく思います。

## 200号に寄せて

本校の歴史とともに歩んできました「狭山ヶ丘通信」も、皆様のおかげをもちまして、通算200号の節目を迎えることができました。

今後とも本校の旬の情報をお届けしてまいりますので、変わらぬご愛顧のほどよろしくお願いいたします。(狭山ヶ丘学園 広報部)

ジャーナルはこちら



英語スピーチコンテストは、本校ウェブサイトの「SAOKA Journal」や「学校案内パンフレット(中学校)」でもご紹介しております。ぜひご覧ください。

パンフレットはこちら



# 2023年度の 大学入試を 振り返って

進路指導部長 市成 敏明



本校の2023(令和5)年度大学合格実績は、国公立大学・大学校合計44名(東京大学文科三類、東京大学理科一類、北海道大学医学部医学科、東北大学文学部、東北大学薬学部、大阪大学外国語学部、弘前大学医学部医学科、高知大学医学部医学科など)、私立大学早慶上理合計29名、GMARCH合計102名といった輝かしいものとなりました(※3月30日時点)。東京大学に2名、国立大学医学部医学科に3名、私立大学医学部医学科に6名の合格者を輩出し、本校史上最高の合格実績を記録しました。この他の詳細な合格実績に関しては、本

校ホー  
この  
本校に  
いきま  
聴して  
明けて  
放課後  
た。私

## 2023年度

# 合格体験記

2023年度  
大学入試合格  
※3月30日時点

Ⅲ類  
3年H組  
**岩野 和志**  
法政大学  
経営学部 経営学科

1、2年生の頃は指定校推薦が取れるだろうと漠然と考えており、定期テスト以外の勉強はしていませんでした。受験勉強に取り組み始めたのは高校3年生の4月下旬ですが、6月までは指定校推薦を利用しようと考えており、受験生としての実感が全くなく、平日は平均3、4時間ほどしか勉強していませんでした。しかし、当時志望していた大学・学部では当初自分が考えたようには指定校推薦が活用できないことを知り、気持ちを一般受験に切り替えました。6月から8月下旬は基礎を固めることだけを考え、英単語、英熟語、古文単語などの暗記や中堅私大レベルの問題集を解いていました。『ターゲット1900』に載っているレベルの英単語、英熟語をおおよそ覚えていないと有名私大の英語長文はほとんど読めないで、この時期に一度全て覚えてその後は一週間に一度復習するようにしました。夏休みの間は中堅私大レベルの問題集を二週ほど解きました。9月から11月下旬までは過去問演習を勉強に取り入れ、様々な大学の問題を解き、どの大学の問題が自分に合うのかを常に考えていました。大学ごとに問題の傾向がかなり違うので、色々な大学の問題を解くことをお勧めします。12月以降は、受験校を決定し自分が受ける大学で一番難易度の高い大学のレベルに合わせた問題演習を行いました。

私が受験勉強を通して感じたことは、読解力がとても重要だということです。レベルの高い大学になればなるほど英語長文は文法の難しさだけではなく文章自体が難しくなったり、少ない情報で文章全体を理解しなければならないことがあります。そのため現代文の問題を毎日一題解くようにしていました。

受験本番では自分の知識量も当然大切だと思いますが、経験が何より大事だと思います。どのような問題が多く出題される傾向にあるか、またどれだけその問題に慣れているかなどが大切になります。そのため、志望する大学の過去問をどれだけ解いているかがカギになると思います。

Ⅱ類  
3年C組  
**長坂 麗奈**  
埼玉大学  
教育学部学校教育教員養成課程小学校コース教育学専修

埼玉大学を志望したのは、尊敬している先生の出身大学であったからです。今起きている様々な教育問題を解決できる術を得たいと思い、教育学専修を選びました。

受験に向けて、まずは教育学部、教育学ではどんなことを学ぶのかを本やインターネットで調べ、自分はどんな先生になりたいかの理想を決めるために先生に関する本も読みました。試験は小論文と面接でしたので、小論文は、1ヶ月前ほどに始めましたが、試験を終えてみると、もう少し早めに取り組んだ方が良かったと思っています。1つ書いたら提出し、国語の先生に添削してもらうという形で対策をしました。面接練習は、2週間前くらいに始めました。想定される質問の答えを考えてから面接練習に臨みました。

当日の試験は、小論文は試験時間90分で小学5年生の道徳の教科書の本文を読み、それについて論じるというもので、字数制限はありませんでした。面接の先生が5人おり、受験生あたり時間は15分と決まっていた。面接中は、面接担当の先生が1人ずつ質問をする形式でした。志望理由をまず聞かれ、その後は私の書いた志望理由書の中身についての質問と、受け答えに対する自らの意見を求められました。

私は当日の朝、試験の30分くらい前に到着できるように心がけました。小論文の時間が練習していた感じと違うと思いましたが、焦らずに書ききりました。面接は、私の時間が来るまで3時間以上あり途中で集中力が切れそうになりました。質問の内容も練習していたものと違い焦りましたが、自分がどんな先生になりたいかというのを軸において話をすることで緊張しなげらもしっかり受け答えできたと思います。

大学では、特に不登校についての対応や、未然に防ぐための対策を学びたいと思っています。他にも様々な教育問題を学び、教育現場で活躍できる先生になりたいと思います。

Ⅱ類  
3年D組  
**関根 稜太**  
東京都立大学  
都市環境学部 環境応用化学科

私が東京都立大学を志望した時期は、2年生の2月頃でした。大学は国公立の学校に通いたいと考えていたため、私立大学については国公立大学の受験の練習という位置づけで受験しました。私は元々、建築学科に進みたいと考えていました。しかし、学校の化学の授業で有機化学を習い始めてからは、化学の分野に今までよりも興味を持つようになり、大学でより深く学んでみたいと感じるようになったため、環境応用化学科を志望しました。

受験を意識して本格的に勉強を始めた時期は、3年生の6月頃です。それまでは定期テストの勉強や日々の授業の予習復習をしっかりとするようにしていました。特に理系科目については、それが最終的に教科の基礎固めにつながったと考えています。受験勉強を本格的に始めてからは、理系科目は得意だったため演習を中心に、苦手だった文系科目については夏までは基礎固め、それ以降は演習に取り組みました。

私が受験生に伝えたいことは2つあります。1つ目は、自分に合った勉強に関する決まり事を見つけることです。私は勉強時間よりも解く問題数やページ数のことを意識して勉強していました。そうすることで、決められた範囲内をより高い集中度で取り組むことができ、効率的に勉強を進めることができました。人それぞれ自分に合う勉強方法は異なると思うので私の勉強の仕方は一例でしかありませんが、皆さんに合う方法を見つけて勉強できたら良いと思います。

2つ目は、第一志望に対する思いを強く持つことです。模試で思うような結果が出せないこともあると思いますが、自分を信じて勉強を続ければ、結果はついてきます。実際、私も模試で思うような成績を出せなかったこともありましたが、最終的には第一志望校に合格することができました。

大学受験は長く苦しいものですが、その中でたくさん成長していけると思います。皆さんが第一志望に合格できることを願っています。

ホームページをご覧ください。

この度の大学入試を受験した生徒たちは、コロナ禍の始まりと共に校に入学し、コロナ禍の終焉が見えてきたこの春に本校を卒業してきました。全国一斉の休校期間中は、本校教員制作の授業動画を視て、生徒は各自で高校の学習内容を学び始めました。休校期間がたてやっと本校に登校することができるようになってからも、朝ゼミ、課後ゼミ、夏期講習などを実施することができない日々が続きまし、私たち教員は生徒をもっと手厚くサポートしたいという気持ちを強

め、Google Workspace for Educationを活用しながら、生徒一人一人の第一志望校合格のために尽力してきました。生徒たちも私たち教員も、時に歯がゆい思いをしながら、試行錯誤を繰り返した3年間でした。

様々な困難に直面しても、生徒たちは最後の最後まで諦めずに全力で戦い抜きました。私たちの期待に見事に応えてくれました。前述の輝かしい合格実績がそれを物語っています。今一度、生徒たちに敬意を表したいと思います。合格おめでとうございます。

年度  
格実績  
点

国公立  
44名

東京大学文科三類、東京大学理科一類、北海道大学医学部医学科、東北大学文学部、東北大学薬学部、大阪大学外国語学部、弘前大学医学部医学科、高知大学医学部医学科など

早慶上理  
29名

GMARCH  
102名

II類  
3年B組  
青野 陸人



早稲田大学  
国際教養学部

私は、そもそも自発的に勉強し始めたのが2年生の最後の記述模試で、受験勉強を始めたのは3年生になってからでした。時期を考えて、英検準一級を取ろうと思い、英語の勉強に3ヶ月費やしました。その時点でも志望校の方向性は定まっておらず、ただ自分の英語を完成させることに必死でした。

準一級に合格し、夏休みに入って国語の勉強を始めたあたりから志望校を国際系の大学、学部絞り始めました。

ハイレベルな英語、国語に合わせて世界史を勉強しているうちに国際系の私立大学のトップを目指すようになりました。私の中でそれは、早稲田大学国際教養学部でしたので、英語は一般試験で満点を取ることを目標に、国語と世界史は共通テストで満点を取ることを目標に勉強しました。

自分の受験期を振り返って、これから大学受験勉強を始める人、または既に始めている人アドバイスできることは、自己分析とそれに基づく“自分の勉強法”の開発が何より重要だということです。これは勉強に限った話ではありませんが、自分で何かをする前に助けを求めることは多くの場合望ましい効果を期待できません。一方、自身で試行錯誤して最善の策を更新し続け、行き詰ったところで助けを求めるといった行為は最大限の効果をもたらすと考えます。もしかしたら“自分の勉強法”に口を出してくる人がいるかもしれませんが、その人はあくまで個人の経験、知識に基づく主観的な常識をあなたに当てはめているだけです。自己分析と試行錯誤を重ねて編み出した勉強法はあなたにとって最善のものです。あなたのことはあなたが一番理解しています。自分を信じてください。

私は今後、多言語の習得とそれを活かした国際的情勢や異文化についての学習に精進しようと考えています。そのような、大学入学後の自分も思い浮かべながら大学を選ぶと良いと思います。順調にいかないこともあると思いますが、頑張ってください。応援しています。

I類  
3年A組  
武岡 侃寿



東京大学  
理科一類

私が東京大学を目指した理由は、東京大学では入学時に大まかに科類で分かれ、3年生で学部を選ぶというシステムが他大学のそれとは異なっていたためです。将来の展望が明瞭でなかった私にとって、このシステムは魅力でした。

第一志望校を決定したのは、3年生の4月です。それ以降の勉強は、時間的には平日6時間、休日12時間を目標にしていました。初めは目標に到達しない日もありましたが、ライバルとなる受験生がどれだけ勉強しているかと考えると、「これでは駄目だ」と奮起することができ、徐々に問題に向き合う時間を増やしていくことができました。また、7月中には基礎的な部分を固め、8月から難易度の高い問題や、東大の過去問に取り組み始めました。共通テストは3年次から平素の勉強に加えて時々取り組み、本番2、3週間前からは毎日の勉強の殆どで共通テスト対策を行いました。

勉強の割り振りで意識していたことは、古典や英語の単語、化学を毎日振り返ること、英語を毎日聞いてリスニングに耳を慣らしていたことです。特に東京大学では二次試験でもリスニングがあり、共通テストよりも難しいです。私はリスニングの度にもっと早くから聞いておけば良かったかと思っていたので、できるだけ早く1日3分でも英語を聞くことをお勧めします。また、得意を伸ばすより苦手を潰すことを意識しました。受験本番では自分の得意教科の問題が難しくなることも想定されるため、差を広げられないためにも各科目可能な限り満遍なく得点できるようにしました。私の場合は英語が他教科より低かったため、夏に他教科より多く量を重ねて出来を揃えました。そして、勉強では復習が何よりも大事です。分からない問題でも、解説を読んでも理解すれば確実に実力に繋がります。

今後受験をする皆さんにお伝えしたいことは、睡眠をしっかりとることが重要なことです。寝不足では勉強の効率が下がりますし、何より本番で最高のパフォーマンスを発揮できなくなってしまいます。是非睡眠も大事にしてください。受験までは長いようで短いです。最後には自分が納得できるような受験になるように一生懸命頑張ってください。皆さんの受験の成功をお祈りしています。

I類  
3年A組  
犬竹 真咲



東京大学  
文科三類

東京大学文科三類を志望した理由は2つあります。1つ目は、全国区の挑戦を乗り越えて集まる、熱心で好奇心旺盛な学生たちと共に四年間のキャンパスライフを過ごすことに、魅力を感じたからです。2つ目は、前期課程で様々な学問分野をある程度学んだ後、後期課程で学ぶ専門分野を決めることができるシステムが、私に合っていると感じたからです。

受験においては、分析と戦略を大切にしました。勉強を少し進めるごとに自分の立ち位置、目標までの距離を確認して、自分の今やっていることがズレていないかを確認しました。自分の勉強内容にしっかりと向き合い考えることは、学力の向上においても、不安の軽減においても、良い効果があったと感じます。

また、3年生になる前から、積極的に模擬試験を受けていました。そのおかげで、見ず知らずの会場でも集中して問題を解けるようになりました。結果の良し悪しは気にせず、イベントのつもりで気軽に受けていました。

自身の受験の体験から得られる教訓は2つあります。1つ目は、入試におけるゴールを認識することです。試験当日、会場で、自分が何をできれば良いのかを知る事が大切です。過去問は勉強を始める前にまず見るべきであるし、どの科目で何割とるのか想定することはとても大切です。2つ目は、自分自身についてよく知ることです。苦手なところを分析し、目を背けず向き合う必要があります。できないことをできるようにする、というのは学習の本質とも言えるのに、しばしば忘れられてしまいます。

大学入学後は、まず幅広い分野について積極的に学び、自分が本当にしたいことは何なのか問いながら、人生にとって有意義な時間を過ごせるようにしたいです。そして、受験のみならず私の生活を幅広く支えてくれた両親、祖父母、先生方、友人、全ての周りの人への感謝を忘れず、社会・世界に恩返しできるような人間になりたいです。